

【登場人物表】

水島日花里（35）

なしお（26）オンラインゲームでの知人

水島幸恵（62）日花里の母

田中洋平（27）日花里の元彼

神宮寺耕介（45）「サンライト」オーナー

神宮寺佐和子（42）神宮寺の妻

岡村玲奈（23）「サンライト」バイト

堀田陽菜（19）「サンライト」バイト

垣内美咲（39）「サンライト」取引先社長

大野清美（50）お弁当屋のオーナー

今村崇矢（34）日花里のお見合い相手

三木善行（40）日花里のお見合い相手

崎山夕子（63）幸恵の友人

オンラインゲームチャットメンバー

アルパカ（32）男性

めいちゃん、ゆうゆう、チョコパ

ネットカフェ店員、不動産屋

○レストラン『サンライト』（日中）

まぶしいほどの光が差し込む店内。

貸し切りで結婚披露パーティをしている
る幸せそうなカップルがファーストバ
イトをしている。

お祝いに集まった友人達で賑わう店内、
ハッピーな空気で溢れている。

日花里 N 「結婚とは何ですか」

にこやかに新郎新婦のサポートをして

いる水島日花里（35）

日花里 N 「結婚なんて、したければ自然にた

どり着く道の先にあるもんだと思っていた」

× × ×

新郎新婦の周りに集まりみんな写真
を撮っている。

日花里、少し離れたところからそれを
眺めながら、

日花里 「（独り言のように）いいなあ、私も
結婚したい」

玲奈 「彼氏いるんでしょ？しないんですか？」

独り言のつもりが隣に居た岡村玲奈
(23)に返事されたのに驚く日花里。

日花里「そんなの…、相手にその気がないと
無理でしょ」

玲奈「ふーん、それでも待ってるなんて、よ
っぽど素敵なのなんでしょうね」

日花里「(言葉に詰まる)…」

表情の暗い日花里。
幸せ満開の空気であふれる店内。

○レストラン『サンライト』内・同日(夜)

片付けられた店内で一人レジ締め作業
をしている日花里。

日花里N「そもそも結婚はどういう人とする
ものですか」

玲奈「お先失礼します」

退店する玲奈。

日花里「お疲れ様」

日花里、少し手を止め物思いに耽る。

日花里N「ビビビッと来て、この人だ!とい

うのがわかるものなのでしょいか」

日花里、暗い窓の外で揺れる木の葉を

ぼんやり見つめながら、

日花里N「誰かが言っていた。恋愛は二人が
お互い向き合っているけれど、結婚は二人
が同じ方向を向いているんだとか」

○人通りの少ない道（夜）

目深に帽子を被り誰かわからない姿で
道端に立つ垣内美咲（39）（日花里に
似た背格好）の前で神宮寺耕介（45）
の運転する車が止まり、垣内が助手席
に乗り込む。

車の中で垣内が神宮寺の首に手をまわ
しキスをする。

日花里N「という事は、相手に他の恋愛対象
がいるとしても、同じ目標を持っていれば
結婚も成立するという事でしょうか」

○道・同日（夜）

日花里、勤務先のレストランからの帰り道、無心で自転車を漕いでいる。

日花里N「私は今一体どこに向かって走っているんだろう。この暗く長いトンネルはどこまで続いているんだろう」

暗い夜道、自転車を立ち漕ぎで走って行く日花里の後ろ姿。

タイトル「前略、トンネルの中より」

○日花里のアパート・同日（夜）

部屋に入りすぐにノートパソコンを立ち上げ、オンラインゲームのアイコンをクリックする日花里。

ゲームが立ち上がるまでに上着を脱ぎ、冷蔵庫から缶ビールを取りパソコンの前でスタンバイ。

ゲームが立ち上がると、すぐ所属しているギルドのグループチャットに書き込む。

日花里のキャラ名は『ぴかりん』

ぴかりんチャット『ただいま！』

めいちゃんチャット『おかえりくん』

アルパカチャット『おつ』

ゆうゆうチャット『おつかれです！』

何人かから返事が帰ってくる。

それを見て嬉しそうな日花里。

日花里 N 「元彼の影響で始めたオンラインゲーム。しばらくやってない期間もあったけど、2年ほど前からまたやり始めた。ゲーム自体をやるより今はこのチャットでのやりとりが唯一の癒やしだ。一人暮らしなのに『おかえり』と言ってくれる存在は嬉しい」

日花里、缶ビールをグビツと飲み、更にチャットに書き込む。

ぴかりんチャット『お腹すいた』

アルパカチャット『晩ごはん食べてないの？』

ぴかりんチャット『今日忙しかったから夕方

休憩で少し食べただけ』

アルパカチャット『何か食べたら？』

ぴかりんチャット『こんな時間から食べたら体に良くないから我慢する』

めいちゃんチャット『ぴかりんさん意識高い系女子だ』

ぴかりんチャット『そんな事ないよ。ただピチピチのめいちゃんと違って代謝も落ちてくる年齢だしねw』

日花里「てか実はビール飲んでるけどね」

日花里、缶ビールをグビッと飲み、

日花里「だめだよっぱり何かおつまみ食べた
い」

日花里、キッチンからおつまみを持ってきて口に放り込む。

日花里「通話してたら食べれなかったな。夜中にゲームしながらおつまみで一杯やってる
る独身アラフォー女の姿は晒されん」

アルパカチャット『ぴかりん、前に行きたいって言ってたクエスト、今から一緒にやる？』

ぴかりんチャット『やる！お願いします！』

ゆうゆうチャット『僕も一緒をお願いします』

アルパカチャット『おk』

ぴかりんチャット『私いつまで経っても弱い

から、みんなと行けたら助かります！』

アルパカチャット『まかせといて！』

ぴかりんチャット『さすがギルドマスター！

頼もしい！』

アルパカチャット『b』

そこにグループチャットとは別に個人

チャットが入ってくる。

なしおチャット『おつかれちゃん』

日花里「（顔をしかめて）げっ、なしお。ス

ルーだな」

スルーして、引き続きグループチャッ

トの方へ書き込む。

再度なしおからの個人チャット。

なしおチャット『嫌いな食べ物なに？』

日花里「（眉をしかめてボソツと）なんだそ

の質問。普通聞くなら好きな食べ物だろ」

日花里、ため息をつき、なしおの個人チャットへ返事する。

ぴかりんチャット『今忙しい』

なしおチャット『オレも』

日花里「なんだそれ！」

日花里N「チャットでは私の年齢や見た目がわからないので、他の男性と思われる人に『女の子』として扱ってもらえるのも癒やしの一つだ。けどどなしおは他のチャット相手とは違い私を女性扱いせずに会話してくる。会話のラリーがいかにか軽快に続くかを意地になるほど意識し、初めはそれを楽しめていた。けどどなしおは私のことを女だと思っただけなのかぜんぜん優しくない！唯一、癒やされない相手だった」

× × ×

ギルドチャット。

ぴかりんチャット『ありがとう！お陰でクリ

ア出来ました！』

ゆうゆうチャット『おつです！』

アルパカチャット『どういたしまして』

めいちゃんチャット『アルパカさん、めいちゃん
のレベル上げ手伝って！もう少しで上がり
そのの（くへこ）』

アルパカチャット『いいよ、ちよつと待って
ね』

日花里「アルパカさんて、ほんと面倒見のい
い人だなあ」

ピコンとビデオ通話アプリの方の着信
音が鳴る。

なしおチャット『この動画見えてみて（URL
が貼り付けてある）』

日花里「（めんどくさそうに）なしお、今度
は何だよ」

日花里、気が進まない感じでURLを
クリックしてみる。

突然ホラーな動画が！

日花里「！！」

日花里、あわてて動画を消す。

日花里「（怒って）ホラーは嫌いって言った

のに！」

日花里、怒りながらなしおへのビデオ
通話アプリのチャットに書き込む。

ぴかりんチャット『ふざけんな！』

なしおチャット『やばくない？』

ぴかりんチャット『こんなの見たら怖くて寝
れなくなるし！二度とやらないで！』

なしおチャット『ホラー好きじゃなかった？』

日花里「（腹を立てて）はあ？いつ誰がそんな事言った？」

ぴかりんチャット『大嫌いだし！どういうつ

もり？怒らせたいの？』

なしおチャット『ごめんね。二度としないよ』

日花里「（ため息）はああ」

なしおチャット『じゃあ今度はお詫びにこれ
見て』

ビデオ通話アプリのチャット画面に長

文が送られてくる。

日花里「なにこれ？『意味がわかると怖い…』
ってこれもホラーじゃん！消去消去消去！」

あわてて消去する日花里。

ぴかりんチャット『むかつくー！やめてつて言ってるでしょ！最低！』

日花里、背後のベッドにもたれかかりぐったりのけぞる。

日花里N「なしお。最初からこんなむかつく相手というわけではなかった。オンラインゲームの同じギルドで普通に会話し、ビデオ通話の連絡先も交換している仲だ。金なし、夢なし、やる気なしの『なしお』らしい」

日花里、起き上がり、なしおのこのチャット欄を見る。

日花里のチャットの後、なしおの返信なし。

日花里「んで、放置かよ！」

日花里N「今日みたいにこちらが暴言を吐いて一方的に接続を切っても次の日には何もなかったように『おつかれ』と声をかけてくる。デリカシーもなしお」

日花里、ため息をついてギルドチャットに戻る。

日花里N「しかし、夜な夜なネットで現実逃避しているような生活を送っていて良いのか？水島日花里さん。独身かつこ35歳かつこ閉じる。いや、そんな事をしている場合ではない。という現実はすぐに突きつけられる事になる」

○公園・別日（日中）

若いカップルや熟年夫婦らが仲良さそうに歩く姿を横目に、怒りを堪えながら自転車を押している日花里。

日花里「（小声で）どいつもこいつも…」

立ち止まり、

日花里「（小声で）返せ…」

そして周りに人がいるのも気にせず叫び出す。

日花里「私の8年間を、返せえー！」

青い空にこだまする日花里の叫び声。

○明るいカフェ・8年前（日中）

T　　（8年前）

向かい合って座っている日花里（27）

と田中洋平（27）

日花里「中国赴任？」

突然切り出された洋平の海外赴任の話
に驚く日花里。

洋平「うん……。キャリアを積む為にも今行く
のがベストだって上司に言われて、俺も将
来の為には今が頑張り時だと思っただ」

日花里「そっか……。そりゃあ洋平の為になる
なら行ったほうがいいよ！」

強がるように笑顔を作る日花里。

日花里「……で、どれくらいの期間？」

洋平「んー……。まだはつきりはわかんない」

日花里「そうなんだ……」

洋平「うん……」

日花里「じゃあさ、この際私もついて行っ
ちやおうかな、中国！」

洋平「え？」

日花里「だって洋平と付き合って5年になるし、私ももう27歳だよ、その…、結婚の事もそろそろ考えたいし…」

洋平「えっ…と、それはちよつと…」

日花里「え？」

洋平「日花里の事は大事に思ってる、もちろん結婚だってしたいと思ってるよ」

日花里「・・・」

洋平「ただ、今はまだ慣れない仕事の事ではないっばいっばいだからさ…、だから待ってほしい」

日花里「(考え込む)・・・」

洋平「・・・」

日花里「わかった」

日花里、思い直したように笑って、

日花里「私待ってるから、中国での仕事、頑張って！」

日花里、一生懸命笑顔を作りながらア
イステイーを吸い込む。

○国際空港 展望台・別日（日中）

日花里、空港の展望台から中国へ飛び立つ飛行機を見送る。

日花里N「そして洋平は中国へ旅立った」

○料理教室・別日（夜）

日花里N「洋平が結婚しようと言ってくれるまでただ日本で待っただけの生活は時間もつたいたいと思ひ、私は料理教室に通うことにした」

仕事後、料理教室で料理を習っている

日花里（30）

講師の神宮寺耕介（40）が、何人かの生徒たちに丁寧に指導している。

イケメンで優しい神宮寺は「神宮寺先生」と囲まれ女性生徒たちは嬉しそうに神宮寺の指導を受けている。

日花里N「そうしているうちに三年が過ぎた。

洋平はまだ中国にいて、私の料理の腕は上

達し、レパートリーもずいぶん増えた」

× × ×

料理教室が終わって生徒がぞろぞろと教室を出ていく中、日花里も楽しそうに出てくる。

そこにメールの着信音が鳴る。

日花里「あ、洋平だ」

嬉しそうにメールを開く日花里。

しかしメールの内容を見た瞬間、表情が凍る。

日花里「え…」

洋平メール『突然ですが実はこちらで運命の人と出会ってしまいました。彼女は身寄りもなく体も弱いため俺が支えてあげないと生きていけない。日花里なら俺がいなくても強く生きて行けると思う。だからごめんなさい。今までありがとう。さようなら。』

日花里「さようならって、え？ちよつと待つて、何？運命の人って、どういうこと？」

泣きそうになりながら震える手で洋平

に電話をかける日花里。

鳴り続ける呼び出し音。

日花里「出て！出てよ洋平！なんでよ！」

日花里、料理教室前の廊下で叫ぶ。

日花里「ふざけんな！」

その声を聞いた神宮寺が、何事かと教室から顔をのぞかせる。

神宮寺「どうしたの？大丈夫？」

ハッと我に返る日花里。

日花里「あ…、すみません、大丈夫です」

日花里、狼狽えながら立ち去ろうとする。が、慌ててベンチに足をひっかけ派手に転んでしまう。

それを見て慌てて駆け寄る神宮寺。

神宮寺「えー？大丈夫？」

日花里「だ…大丈夫です…」

と言いながら顔を上げる日花里。

顔は涙でぐしゃぐしゃ。

○料理教室前のベンチ・同日（夜）

神宮寺と日花里、二人並んでベンチに座り、神宮寺が買ってきた缶コーヒーを飲んでいる。

神宮寺「そつかあ、それは辛いね」

日花里「結婚するつもりだったのに…」

日花里、鼻をすすっている。

日花里「三年待たされたのに…」

神宮寺「三年かあ、長いよなあ」

コーヒーを飲む神宮寺。

神宮寺「でもさ、その三年で水島さんの料理の腕すごく上がったから、無駄な三年ではなかったと思うよ」

日花里「(腑に落ちない)・・・」

神宮寺「あのさ、オレ夢があつてさ。自分の店持ちたいと思ってるんだよね」

日花里「(力なく) ……そうなんですか」

神宮寺「うん。優しい味の家庭料理を出すレストラン」

日花里「…夢、叶うといいですね」

自分は人の夢の話を知っている状況じ

やないという気持ちで答える日花里。

神宮寺「でき、水島さん。一緒に店やらな

い？」

日花里「…へ？」

突然の事で意味が理解出来ずポカんとする日花里。

○貸し店舗・別日（日中）

神宮寺のレストラン開店の為に店舗の

内見に来ている神宮寺と日花里。

明るくアットホームな雰囲気店舗で、

神宮寺は不動産屋と楽しそうに話して

いる。

日花里N「その後、二度と洋平の電話が繋がることはなかった。そして突然ぽっかりと空いた心の穴を埋めるように私は神宮寺先生の誘いに乗り：」

電話がかかってきて不動産屋がその場を離れる様子。

神宮寺「レストランの名前は日花里の名前か

らとって『サンライト』にしよう。で、レストランが軌道に乗ったら、結婚しよう」

日花里、にっこり微笑む。

二人きりになったところで神宮寺は日

花里の両手を取りキスをする。

日花里N「そういう関係になった」

○レストラン「サンライト」・別日（日中）

アットホームな雰囲気のレストラン

「サンライト」の昼過ぎ、お客さんで

賑わっている。忙しそうにホールで働

いている日花里。

日花里N「それから5年が過ぎ、神宮寺先生

の店は健康志向の優しい家庭料理の味がう

け、連日お客様で賑わう人気の店となって

いた。私は店のチーフとしてホールを切り

盛りし、厨房に立つことはほとんどなかつ

た。が、神宮寺先生との夢の為に一生懸命

尽くし、忙しく充実した毎日を過ごしてい

た」

神宮寺が爽やかな笑顔で厨房に何か指示を出しテキパキと動いている。

それを見つめる日花里。

日花里 N 「神宮寺先生は傷ついていた私を癒やし、レストラン経営に携わるといいうやりがいのある仕事も与えてくれ、私には恩人でもあり、料理人として憧れでもある」

自分を見つめている日花里に気づき、ニツコリ笑いながらバックヤードに行く神宮寺。

日花里 N 「しかし神宮寺先生が結婚を約束してくれて5年経っていたが、私は未だに……」

玲奈 「水島チーフ、今週末の予約のお客様さんからメニュー内容の事で問い合わせがあったんですけど」

玲奈が持ってきたメモを受け取る日花里。

日花里 「ああ、わかった。オーナーに確認するね」

日花里 N 「神宮寺日花里になれていない」

胸につけている名札は『水島』

そこに取引先の女社長、垣内が店内に入ってくる。

垣内「オーナーいる？」

日花里「はい、事務所にあります」

垣内「お邪魔するわね」

垣内、慣れたようにそのまま事務所の方へ入っていく。

○「サンライト」事務所・同日（日中）

事務所のデスクに座って事務作業をしている神宮寺。

そこに垣内が入ってくる。

それに気づいて立ち上がる神宮寺。

神宮寺「垣内社長」

神宮寺に近づき耳元で色っぽくささやく垣内。

垣内「ネット商品化第二弾についての打ち合わせをさせて頂こうと思ひまして」

○「サンライト」店内・同日（日中）

少しお客が引いた店内で仕事をしている日花里。

事務所から機嫌良さそうに垣内が出てきてそのまま店を出ていく。

それをだまって目で追う日花里。

陽菜「休憩お先失礼します」

日花里に伝えてバックヤードに入っていくバイトの堀田陽菜（19）

○「サンライト」事務所・同日（日中）

神宮寺、デスク横に立ち考え事をして
いる。

陽菜、ドアから事務所内をのぞき神宮寺を見つけて入ってきて、嬉しそうに神宮寺の腕に抱きつく。

陽菜「オーナー！」

神宮寺「こらこら」

嬉しそうに笑ってくっついてきた陽菜をなだめる神宮寺。

陽菜「次いつご飯いけますかっ」

甘えるように上目遣いで話す陽菜。

神宮寺「うーんそうだなあ、陽菜はいつがい
いの？」

陽菜「じゃあああ、来週の月曜日！」

神宮寺「月曜かあ」

神宮寺、カレンダーを見る。

神宮寺「オーケー、いいよ」

陽菜「ほんと？嬉しいい！」

飛び跳ねながら更に強く腕にしがみつ
く陽菜。

そこにコンコンとノック音がしガチャ
つとドアが開くと同時に日花里が入っ
てくる。

日花里「失礼します」

神宮寺、慌てる様子もなく、

神宮寺「じゃあ今日もよろしく頼むよ」

陽菜の腕をほどいて優しく頭をポンポ
ンする神宮寺。

陽菜「はあい」

嬉しそうに事務所を出ていく陽菜。

二人の様子を無表情で見ている日花里。

神宮寺、デスクの書類を整えながらふ

うとため息をつき、

神宮寺「バイトの機嫌を取るのも仕事のうち

なんだよ」

日花里、神宮寺の言葉には反応せず、

日花里「今週末予約のお客様からメニューの
内容のことで問い合わせがあったんで」

神宮寺「ん？どんな内容？」

日花里、メモを渡しながら、

日花里「そのお客様、奥さんのお友達の方で
すよ」

神宮寺「あ、そうなんだ」

日花里N「そうなんです。神宮先生は出会っ
た時から既婚者で、店が軌道に乗ったら奥
さんと別れて私と結婚したいと言ってはく
れていたけれど、まだその気配すらない」

そこにコンコンとノック音がして玲奈
が入ってくる。

玲奈「失礼します。水島チーフにお電話入ってます」

○「サンライト」・同日・同時刻

カウンターにある電話に出る日花里。

日花里「お待たせいたしました、水島です」

佐和子電話の声「みずしま…ひかりさん？」

日花里「はい…」

佐和子電話の声「神宮寺ですけど」

日花里「あ…、（ごくつと唾を飲み込み）奥様…」

佐和子電話の声「明日、お時間あるかしら」

日花里「明日…ですか…」

○カフェテラス・別日（日中）

神宮寺佐和子（42）と日花里が向かい合せてカフェのテラスに座っている。
ピンと背筋を伸ばし堂々と座っている。
佐和子と、うつむいて恐る恐る佐和子

をチラ見している日花里。

佐和子「…で、」

佐和子、持っていた封筒から数枚の写真
真をテーブルの上に出し、

佐和子「これ、あなたよね？」

日花里「(ギョツとして) え？」

日花里、写真をこわごわ覗き込む。

写真には女性の肩を抱いてラブホテル
に入っていく神宮寺が写っている。

女性は目深に帽子を被りサングラスを
しているが日花里ではない。慌てて身

を乗り出し写真を手取る日花里。

日花里「(顔を歪めて) これ、私じゃありません」

佐和子「フンッ。しらばっくなくても無駄よ。

レストラン開業の頃からあなたがいつつも
主人にくっついてたのは知ってるんだから。

そんな見え透いた嘘がまかり通ると思って
るの？」

日花里「いいえ、これは…」

日花里、怒りに震え写真を睨むように
見ている。

日花里「奥様！」

いきなり勢いよく椅子から立ち上がる

日花里。

その様子に一瞬たじろく佐和子。

日花里「この写真、ちよつとお借りします」

佐和子「え？」

写真を掴み走り出す日花里。

佐和子「ちよつと！何するのよ！」

○道・同日（日中）

日花里、泣きそうな表情で自転車を全
力で漕いでいる。

日花里「私、ホテルなんか行ったことない。

いつもうちのアパートに来てたし。ていう

か最近職場以外で会う事ほとんどなくなっ

てたし！」

○「サンライト」事務所・同日（日中）

息を切らして通用口から事務所へ直行し勢いよくドアを開ける日花里。

デスクに座っている神宮寺。

神宮寺「あれ？日花里、早いね、今日は午後からじゃないの？」

日花里、無言で神宮寺の妻に借りた写真をデスクに置く。

神宮寺「ん？なに？」

写真をのぞき込み顔色を変える神宮寺。

神宮寺「・・・！」

日花里「これって…、垣内社長ですよね」

× × × (フラッシュ)

垣内「お邪魔するわね」

垣内、慣れたようにそのまま事務所の方へ入っていく。

× × ×

神宮寺「日花里…なんでこんなもの…」

日花里「(泣きそうなのを堪えながら)なん

か、店の為とか、バイトの機嫌とらないといけないとかわけわかんない事言われても

耐えていればいつか報われるんだって…、
信じて…、信じて待ってたのに！」

神宮寺「日花里…、オレも店をやっっていくに
は不本意なことも我慢してやっつけていかなき
やならないんだよ。日花里ならわかってく
れるだろ？」

日花里「わかりません！私もう無理です。終
わりにします。店も辞めます！」

日花里、事務所を飛び出す。

神宮寺「日花里！ちよつと待って！」

神宮寺、あわてて引き止めようと追
かける。

そこに佐和子が現れる。

神宮寺「佐和子！」

佐和子「あなた、ちよつといいかしら」

○公園・同日（日中）

若いカップルや熟年夫婦らが仲良さそ
うに歩く姿を横目に、怒りを堪えなが
ら自転車を押している日花里。

日花里「（小声で）どいつもこいつも…」

日花里、立ち止まり、

日花里「（小声で）返せ…」

周りに人がいるのも気にせず叫び出す。

日花里「私の8年間を返せー！ー！」

青い空にこだまする日花里の叫び声。

○日花里のアパート・同日（夕方）

日花里、放心状態でベッドに寝転んで
いる。

スマホの着信音が鳴る。

見ると神宮寺から。日花里、ポトンと
無理にベッドの下にスマホを落とす。

日花里M「なんだこのすさまじい孤独感は。

恋人と仕事、結婚への道筋、心の支えにし
ていたものを一気に失った喪失感」

日花里「もうアラフォーなのに」

日花里、ゴロンと横向きになり顔を布
団にうずめる。

日花里「あの時、洋平に捨てられて寂しかった

たからとは言え、既婚者ってわかっていながら神宮寺と付き合った私が浅はかだったんだ」

日花里ちよつと考えて、

日花里「いや、神宮寺が独身だったとしてもどっちみち同じことか。私の見る目が甘かったんだ」

日花里、仰向けになり天井を見つめて。

日花里「あー！結婚への道が遠のいたじゃん！てかお先真っ暗だよ！」

目をギュッと閉じる日花里。

○日花里の空想 真っ暗闇の世界

足元だけ見える道。

先は真っ暗で何も見えない。

ただ立ち尽くしている日花里。

○日花里のアパート・同（同）

ベッドに寝転び目を閉じた日花里。

日花里「あ、すごい……。お先真っ暗が見える」

日花里N「まさに私は今真っ暗で出口の見えないトンネルの中にいる。一度遠くに見えていた光はただの幻だったのだ」

そこにピンポンと家の呼び鈴が鳴る。

びくっとして目を開ける日花里。

玄関の外から叫ぶ神宮寺の声。

神宮寺「日花里！いるんだろ！話させてくれ！たのむ！」

日花里、起き上がり一瞬どうしようかと迷うが、あわてて布団をかぶり居留守を使う。

神宮寺「日花里がいてくれないと困るんだよ！」

日花里「どうせ：店の心配してるんでしょ：」

日花里、布団の中でつぶやく。

神宮寺「日花里！」

布団の中でギュッと目をつぶる日花里。

○日花里の実家外観（夕方）

○日花里の実家玄関（夕方）

実家の玄関を力なく入ってくる日花里。

日花里「ただいま」

○日花里の実家 リビング・同日（夕方）

リビングにダルそうに座ってスマホを

見ている日花里。

お茶を入れてリビングに運んできた日

花里の母 水島幸恵（62）。

日花里「しばらく泊まってく」

幸恵「それはいいけど、レストラン辞めちゃ

ってこれからどうすんの？」

日花里「なんかバイトでも探すかな」

幸恵「あんた、そのレストランのオーナーさ

んとお付き合いしてるとか言ってたなっ

た？」

日花里「別れた……。別れたから店も辞めた」

幸恵「ふーん……。それじゃあんたの結婚まで

の道のりもまた振り出しに戻ったってわけ

か」

日花里「そうですね」

幸恵「それだったらさ、ずっと嫌だって言うてたけど、もう観念してお見合い、してみたらどう？」

日花里「うーん：でも、知らない人と話すの苦手なんだもん」

幸恵「いい歳して何言ってるの。私もお父さんも、あんたが早く誰かと一緒になって落ち着いてくれないと安心出来ないんだから」

日花里「・・・」

幸恵「崎山さんがずっとあんたにお見合いの話どうかって言ってくれてるのよ。3と4人くらい日花里に合いそうな話があるらしいわよ」

日花里「(お茶をすする)・・・」

幸恵「ね？もう悠長にしてられる年じゃないんだから」

日花里「・・・」

○実家の日花里の部屋・同日(夜)

部屋着姿の日花里、パソコンを開いて
オンラインゲームでグループチャット
をしている。

ぴかりんチャット『彼氏と別れてそして無職

(泣)』

アルパカチャット『えーそうなんだ？』

めいちゃんチャット『えー！つらみが深過ぎ
る』

チョコパチャット『ぴかりんさんならまたき

つと素敵な出会いが待ってますよ！』

ゆうゆうチャット『ぴかりんさん、元気だし
て！』

ぴかりんチャット『ありがと(泣)』

日花里、嬉しそうにパソコン画面を見
つめキーボードを叩く。

ぴかりんチャット『だから朝まで狩り出来る

よw』

ゆうゆうチャット『朝までw』

チョコパチャット『朝まで狩りまくりましよ
う！』

めいちゃんチャット『明日普通に学校だから朝までは無理ーw』

日花里、パソコン画面を見ながらフフと笑う。

そこに、なしおから個人宛てチャット。

なしおチャット『おつかれちゃん』

日花里、ピクツと眉を動かす。

ぴかりんチャット『彼氏に浮気されて独り身になった可哀想な無職の女に何か用？』

なしおチャット『どんまい！』

なしおチャット『俺なんてずっと彼女いないからそういう目に合う事ないよ！』

ぴかりんチャット『どんまい！』

ぴかりんチャット『お見合いするかな』

なしおチャット『お見合いナニソレ？オイシイノ？』

ぴかりんチャット『玉の輿に乗れたら美味しいだろうね』

なしおチャット『玉残し？』

ぴかりんチャット『パチンコじゃないんだか

ら』

なしおチャット『多摩の古史？』

ぴかりんチャット『意味わからんw』

日花里、クスツと笑う。

ぴかりんチャット『なしお、今通話出来る？』

なしおからビデオ通話アプリの通話着

信音が鳴る。

日花里、ビデオ通話ボタン押す。

画面にカメラ目線ではない無表情の、

なしお(26)の顔が写る。

なしお通話「おつかれちゃん」

日花里「おつかれ」

日花里、ゲームの操作をしながら無表情でたんたんと話す。

なしおもゲームをしながら目線合わせず話す。

なしお通話「どしたの？」

日花里「別になんもない」

なしお通話「なんもないのにオレと話したいの？」

日花里「話したくない」

なしお通話「やだ話そうよ」

日花里「気持ち悪い」

なしお通話「それほどでもないよ。2、3日

風呂入ってないくらいだよ」

日花里「入れよ」

なしお通話「じゃあ入ってくるよ」

日花里「今から入るのかよ」

なしお通話「ダメなの？」

日花里「いいし！」

日花里、プチっとビデオ通話を切る。

なしおチャット『じゃあ洗ってきま〜』

日花里「全くタイミングとか考えない奴」

不機嫌そうにゲームを続ける日花里。

○居酒屋外観（夜）

○お見合い場所 居酒屋・別日（夜）

日花里と今村崇矢（34）、居酒屋の席

で向かい合い少し硬くなっている二人。

日花里 N 「そして即、日取りの決まったお見合いの日。気楽に話せるようにと、居酒屋で二人だけで会うことになった。相手は不動産業を営む家の息子、今村崇矢さん 34 歳。1 歳年下」

今村 「初めてお会いするのにこういう場所で
すいません」

日花里 「いえ、こういうとこの方が話、しや
すいですよね」

今村 「（人懐っこい笑顔で）良かったあ。あ、
何食べます？」

二人、一緒にメニューを開いて見る。

日花里 「このおすすりめコースとか良さそうで
すね」

今村 「それいいっすね、それしましよ。あと、
カクテキ食べたいっすね」

日花里 「あ、私もカクテキ大好きです」

今村 「美味しいっすよね。キムチはやっぱカ
クテキがダントツっす。あのがっちりかじ
れる歯ごたえがいいんすよね」

日花里「（笑いながら）あくわかります。

ヘルシーですしね〜」

和やかに会話が続く。

× × ×

数種類の食べ物が並ぶテーブル。

二人、和やかに食事をしている。

日花里「ありきたりですけど、何か趣味って

あります？」

今村「僕は体動かすこと全般好きなんすけど、

やっぱり一番は祭りっすね」

日花里「あー…、お住まいのあたりお祭り盛

大なところですもんね…」

今村「（目をキラキラさせて）めちやくちや

盛大つすよ！日本人の血がたぎるっていう

か、男のロマンって言うか、祭りはいいつ

すよねえ。うちは親父もお袋も地元なんで、

正月より熱いっすね。日花里さんもぜひ見

に来てくださいよ！」

日花里「そうですね」

にっこり返事するが、祭りにはあまり

興味のない日花里。

今村「すいませーん、おかわりください！」

今村がオーダーしている隙に、

日花里「（横下向いて）生粋のお祭りファミ

リーかあ…」

○居酒屋の外・同日（夜）

日花里と今村、居酒屋を出てくる。

日花里「どうも、ご馳走様でした」

今村「いえ、今日はありがとうございました。

楽しかったっす」

今村、爽やかな笑顔。

日花里「また良かったら、お話したいです」

今村「こちらこそっす、ぜひぜひ」

日花里「じゃあ」

今村「うっす」

にっこり笑って別れる二人。別の方向
に向かって歩き始める。

日花里「お祭りさえ乗り切ればクリアできる
かあ？」

薄暗い街灯の続く通りを歩きながら考
え込む日花里。

○年季の入った喫茶店外観（日中）

○お見合い場所 喫茶店・別日（日中）

少し薄暗い喫茶店に入り目を凝らして
店内を見渡す日花里。

崎山「日花里ちゃん！こっちこっち！」

甲高い声で奥から手招きして呼ぶ崎山
夕子（G3）

日花里「ああ（崎山の居る席まで行って）お
待たせしました」

崎山「いえいえく大丈夫よ。日花里ちゃん
ホットでいい？」

日花里「あ、はい」
崎山「すみませーん！ホットもうひとつ！」

店員に向かって叫ぶ崎山。

日花里、向かいに座る三木善行（H00）
に軽く頭を下げ、崎山の隣の席に座る。

崎山「こちら三木善行さん、40歳。でこちらが水島日花里さん35歳」

日花里「水島です、よろしくお願いします」

三木「(すごく小さな声で)三木です、よろしくお願いします」

崎山「三木さんね、パン工場で22年勤められててね、それはホント真面目な方なよろ。真面目が歩いてるっていうか、とにかく性格は穏やかで、貯金もあって、ギャンブルの類は一切興味ないんですって。もう真面目だからほんともう、ねえ」

崎山、とにかくまくしたてる。

日花里「(苦笑いで) そうなんです」

三木「(恥ずかしそうに)・・・」

崎山「とにかく、お父様も真面目な方で、お母様も優しい方で、育った環境が良いのよね。やっぱり結婚生活って穏やかな方が良いじゃない？長年一緒に暮らすなら落ち着いて安定した生活が一番なもの」

日花里、崎山のマシンガンのような三

木の売り込みトークに引き気味。

崎山「あら、私ったら、一人でしゃべりすぎちゃってごめんなさいね。日花里ちゃん何か三木さんに聞きたいこととかある？」

日花里「あ…、えっと…、ご趣味は何ですか？」

崎山「そうね！趣味。三木さん、本読んだりするの好きなのよね？」

三木「ああ…、はい。まあ、読書したり、好きです…かね」

崎山「読書、いいわよね〜！」

日花里「どんな本読まれるんですか？」

三木「ん…と…小説とか…、色々…です…」

崎山「なるほど〜！色々読書！いいじゃない。じゃ、三木さんは日花里ちゃんに聞きたいこと何かある？」

三木「いやあ…、あー。えと、ご趣味は…？」

崎山「そうね、日花里ちゃんの趣味も聞いとかないとね。日花里ちゃんの趣味はなに？」

日花里「あーえっと…」

日花里 M 「ここでオンラインゲームでチャットとか言うのはアレだよな……」

日花里 「私も読書とか……、あと料理とか……です」

崎山 「あらま！二人とも読書！やだ気が合うじゃない、相性ピツタンコ！」

一人嬉しそうにはしゃぐ崎山。

○日花里実家ダイニング・同日（夕方）

夕食の準備をしている幸恵。

三木とのお見合いで疲れた様子の日花里が入ってくる。

日花里 「ただいまー」

幸恵 「おかえり！どうだった？」

日花里、ドカッと椅子に座りぐったりしている。

幸恵、作業の手を止めて向い側に座る。

日花里 「どうって、崎山さん、どーしても三木さんを結婚させたいっていうのが前面に出過ぎ。てか真面目しか取り柄ないのか

つてくらい真面目を押し過ぎ。ずっと崎山さんだけが喋ってたよ」

幸恵「三木さんって人、大人し過ぎるから崎山さんも自分がどうにか結婚させてあげたいみたいよ」

日花里「それはわからなくないけど、でも三木さんという人がどういう人か結局わからなかったよ」

幸恵「そっかあ」

日花里「ぜんぜん何も知らない人と結婚する為に、ゼロから人間関係構築していくって…、あー、めんどくさい作業だなあ」

幸恵「まあ、日常の中で自然と知り合っているのとはまた違うもんねえ」

日花里「初めにお見合いした今村さんは話しやすいかったのよ。普通に会話出来て、それで少しずつお互いを知っていけそうな気がした」

幸恵「じゃあ、今村さんにすれば？」

日花里「いやそんな簡単に決められないけど」

幸恵「いやいや、あなたには選んでる時間なんてないのよ」

日花里「いやいや、それでも一生の問題ですよ」

幸恵「あなたはどんな人と結婚しても、そこに幸せを見つけれられる人だと思うよ」

日花里「なによそれ。そんな出来た人じゃないし。てゆーか一応結婚には明るい未来を期待したいからね」

幸恵「じゃあ、今村さんと三木さん、お返事どうするの？」

日花里「うーん：まあ、今村さんとはもう少し時間かけて話してみたいなと思うけど、三木さんは：、私には合わないと思う」

幸恵「じゃあ、崎山さんにそうお返事しとこ
うか？」

日花里「うん：」

○実家の日花里の部屋・別日（夜）

日花里、風呂上がりで髪をタオルで拭

きながらパソコンをのぞく。

つけっぱなしだったオンラインゲームのチャットに、ギルドマスター『アルパカ』から個人チャットが入っている。

アルパカチャット『ぴかりん、昨日話してた装備渡したいんだけど今大丈夫？』

日花里「あ、アルパカさん、装備くれるんだ！いつもこんな私の面倒見てくれて、ありがたいなあ」

チャットを打つ日花里。

ぴかりんチャット『ごめん、放置でお風呂行ってた。今から大丈夫？』

アルパカチャット『おk！』

ギルドホールにいたアルパカからパーティ申請が来てパーティチャットで二人話し始める。

アルパカチャット『これ、もう使わないから使って』

ひかりんチャット『ありがと！私は絶対自力でゲット出来ないやつだw』

ゲーム上で装備の受け渡しをする二人。

アルパカチャット『どういたしましてb』

アルパカチャット『ぴかりん、こないだ彼氏

と別れたって言うってたでしよ？』

ぴかりんチャット『うんw愚痴っちゃったね

w』

アルパカチャット『やっぱ失恋の特効薬は次

の恋しかないっしよ』

ぴかりんチャット『そうは言っても、出会い

なんて無いから次の恋がいつやってくるか

わかんないよw』

アルパカチャット『それじゃあ、お試しに俺

と出会ってみる？』

日花里、ドキッとして手を止める。

日花里「え？」

でもすぐに首をプルプル降って、

日花里「いやいや、リアルの話なわけないよ

ね」

ぴかりんチャット『もう目の前にいますけど

w』

アルパカチャット『リアルでだよ？』

日花里、またハツとして手をひっこめる。

日花里「リアルで？…て事は」

ぴかりんチャット『オフ会的な？』

日花里、恐る恐る画面を見つめる。

アルパカチャット『リアルデートだよw』

日花里、また固まる。

日花里「つまり？現実世界で？二人で？会うってこと？え、ちよつと待って待って、アルパカさんて確か32歳でIT企業に勤めてるとか言ってたよな。これっていいのか？アリなのか？」

ぴかりんチャット『マジで言ってます？』

アルパカチャット『ぴかりんさえ良ければ』

日花里「なんか、降ってきた。出会いが突然降ってきた」

期待に目を輝かす日花里だが、ふと思
い出す。

日花里「あ、でも…」

ぴかりんチャット『アルパカさんて北海道じゃなかった？』

アルパカチャット『そうだよ。札幌』

日花里「札幌くくく！遠いつ！」

アルパカチャット『ぴかりんは埼玉だっけ？』

ぴかりんチャット『うん』

アルパカチャット『6月に出張で東京に行く

から、その時良かったら食事でもしない？』

日花里「6月って、3ヶ月も先じゃん」

日花里、力が抜けてうなだれるが、す

ぐ決心した表情でうなずき、

ぴかりんチャット『札幌行く！私今暇だし、

北海道一回行ってみたかったんだよね』

アルパカチャット『ほんとに？』

日花里「これは神様がくれたチャンスだよね。

考えてる暇なんてない」

ぴかりんチャット『今週末は時間ある？』

アルパカチャット『今週土曜の昼まで仕事だ

から、夕方には時間作れると思う』

ぴかりんチャット『おk！土曜の夕方集合

で！』

アルパカチャット『わかった！楽しみにしてるね！』

日花里「何年もレストランの為にほぼ休みなく働き続けてきたんだし、ご褒美に北海道旅行くらい、いいよね」

コンコンと部屋をノックする音。

幸恵「日花里、入るよ」

日花里「あ、うん」

パソコンを少しだけ閉じる日花里。

幸恵、ドアから顔をのぞかせて、

幸恵「さつき崎山さんから電話あったから、

お見合いの返事しといたんだけど…」

日花里「うん」

幸恵「三木さんの事は丁重にお断りしといた」

日花里「うん、ありがと」

幸恵「それで今村さんの事は…、あちらから

お断りされた」

日花里「え？うそ？」

幸恵「年上はなんか気を遣うんだって」

日花里「・・・」

幸恵「そう言ってもひとつしか年変わんないのにねえ」

日花里「そんなの、それだけが理由じゃないに決まってんじゃない。とりあえずのお断り常套句だよ」

幸恵「まあ、くじけず次行ってみよう！」

日花里に気を遣い無理やり明るく振る舞って見せる幸恵。

しかし予想外に今村に断られた事に落ち込む日花里。

気持ちを持ち直そうと、

日花里「ちよつと北海道行ってくる」

幸恵「え？何？突然」

日花里「次は北海道ってこと！」

幸恵「（キョトンとして）はい…、行ったらっしやい」

○札幌どこかの駅前・別日（夕方）

駅前て独りアルパカを待つ日花里。

日花里「さつぶ！北海道さつぶ！3月つての
にさすがめちやくちや寒いな」

そこにスーツ姿のスラッとした男性、
アルパカ（32）が寄ってきて、

アルパカ「ぴかりん：さん？」

日花里「はい：。アルパカさん？」

日花里、ニッコリ笑うその爽やかなイ
ケメンに見惚れる。

日花里M「ああ、神様ありがとう！」

○レストラン・同日（夕方）

日花里と、アルパカ、楽しそうに話
ながら食事をしている。

幸せな時間にうっとりしている日花里。

○駅前通り・同日（夜）

レストランから出てくる日花里とアル
パカ。

日花里「ごちそうになっちゃって、ごめんな
さい」

アルパカ「いえいえ、ぴかりん交通費とかめ
ちやくちやかかっているだろうからこれくら
い払わせて」

日花里「(嬉しそうに) ありがとう」

イルミネーションの綺麗な通りを二人
で歩きながら、

日花里M「アルパカさん、思ってた通りのめ
ちやくちやいい人じゃん。イケメンだし。

これは、北海道に移住もありかあ」

アルパカ「ぴかりん、思ってた通りの人だっ
た。すごく話しやすいし」

日花里「私もアルパカさんの事そう思った！」
にっこり笑い合う良い雰囲気の二人。

アルパカ「これからどうする？」

日花里「あーどうしよう」

アルパカのスマホの着信音が鳴る。

慌ててスマホを取り出すアルパカ。

アルパカ「あ、ちよつとごめんね」

日花里「いえ、どうぞ」

アルパカ「(スマホに) もしもし」

かすかにスマホから漏れ聞こえる女性の声。

少し表情を曇らせさりげなく聞き耳を立てる日花里。

アルパカ「…うん。あ、ごめん、それ明日買っとくよ。…うん今日はまだ帰るの遅くないと思うから…。うんわかった、じゃあね」

スマホを切るアルパカ、

日花里「あ…、もしかして彼女…とか？」

恐る恐る尋ねる日花里。

アルパカ「ん？今の電話？いや、パートナーから」

にこやかに言うアルパカ。

動揺を悟られないように作り笑顔で、

日花里「あー、彼女じゃなくて彼氏？」

アルパカ「あはは、パートナーは女性だよ」

とても優しい笑顔で笑うアルパカ。

日花里、頭がバグりかけながら

日花里「ということは…、やっぱり彼女？」

アルパカ「彼女っていうか、パートナー」

日花里 M 「いやそれ一般的には彼女じゃん！
彼女いるんじゃない！あー詰めが甘かった。

確認するの忘れてたー」

アルパカ 「あ、でも別にパートナーの事は気にしないで。俺は据え膳はありがたく頂く主義だから」

悪気なく言うアルパカ。

目が点の日花里。

日花里 M 「なんだそれは！」

アルパカ 「出会いってそういうもんでしょ？」

とにっこり笑う爽やかすぎるアルパカ
に愕然とする日花里。

日花里 「(平然を装い) まあ、そうだね、出
会い方は色々あるし、人それぞれの考え方
もあるし、うん。まあ今日はアルパカさん
と話せて楽しかったよ。気分転換になった
し。あ、じゃあ私、明日早いからそろそろ
行くね！うん。誘ってくれてありがとね！」
無駄に明るく振る舞う日花里。

アルパカ 「(にっこり笑って) そっか、じゃ

あまた機会があれば」

爽やかに手を降るアルパカ。

イルミネーションの中を早足でホテル
に向かう日花里。

日花里「あー！またやってしまった。なんで
ちゃんと先に確認しなかったんだ私。舞い
上がりすぎだろ。ってか、据え膳で、彼女
ありの分際で私とどうにかなろうと考えて
いたわけ？え？てか、天然なの？アルパカ
さんって天然なの？」

冷たい風がビューっと吹いて、

日花里「うおおおおっ！さっぶ！」

コートの襟をキュツと閉めて、

日花里M「いや：、アルパカさんどうこうよ
り、自分の愚かさに：北海道の寒さが：、
凍みまくるじゃないか」

イルミネーションの通りを過ぎ、寒さ
に耐えながら暗い夜道に向かって独り
歩く日花里の後ろ姿。

○日花里の実家外観（日中）

○日花里の実家 リビング・翌日（日中）

くつろいでいる幸恵。

北海道から帰ってきた日花里。

日花里「ただいまー」

幸恵「あらおかえり。早かったね」

日花里「はいお土産」

幸恵「あら、ありがとう」

幸恵、お土産の袋を開けながら、

幸恵「今朝崎山さんがまた別のお見合い話あるって電話かけてきたよ」

日花里「・・・」

幸恵「今度の人は、なんとか工業っていう会社の跡継ぎ息子さんらしいんだけど、フィリピンの長期出張が多いからほとんど家に居ないし気楽だろうって。だけど、お姑さんと同居だから、お姑さんとさえ上手くやっていけたらって事らしいけど」

日花里、自分が買ってきたお土産のお

菓子を頬張りながら、

日花里「それもなかなかのお話ですな」

幸恵「どうする？会ってみる？」

日花里「いやあ、ちよつと…お見合いは休憩

で…。最近色々ありすぎて疲れちゃった」

幸恵「了解。お茶入れよつか」

○日花里の実家 廊下・同日（夜）

風呂上がり、力なく階段を登り、自分の部屋へ行く日花里。

○実家の日花里の部屋・同（夜）

いつもの様にパソコンを立ち上げてみるがちよつと考えてから、ゲームを開いてみる。

アルパカはインしていない。

少しホツとしてギルドチャットに書き

こんでみる。

ぴかりんチャット『こんばんは！』

ゆうゆうチャット『ぴかりんさんこんばんは』

めいちゃんチャット『こんばんわん』

チョコパチャット『肉まん旨い！』

めいちゃんチャット『チョコパさん肉まん食べてるの？』

ぴかりんチャット『肉まんいいね！私も食べなくなっちゃった』

めいちゃんチャット『えー、ぴかりんさんと肉まんって繋がらないw肉まん食べなさそうだもんw』

ゆうゆうチャット『なんかわかるw』
ぴかりんチャット『えーwそう？』

チャットではそう書き込んだが、

日花里「だって、独身アラフォー女の夜中の肉まんなんてイメージされたくないでしょうが。ここでは大人のお姉さんキャラでいたいんだもん」

アルパカチャット『おつかれ〜』

ギルドチャットにアルパカの書き込み。
ドキっとする日花里。

アルパカチャット『今からメインクエスト行

く人いる？」

ゆうゆうチャット『ノ』

チョコパチャット『行きたいです！』

めいちゃんチャット『行く！』

どうしようかと迷っている日花里。

アルパカチャット『ぴかりんはどうする？』

日花里「あ、けっこう普通？」

ぴかりんチャット『行きます！』

アルパカチャット『おk！準備するね！』

日花里、アルパカのいつもと変わらない

い様子に拍子抜けした様子。

× × ×

ゆうゆうチャット『お疲れ様』

チョコパチャット『ありがとうございました』

めいちゃんチャット『ありがとうございました！』

アルパカチャット『おつかれ〜』

ぴかりんチャット『お疲れです！』

日花里「結局アルパカさん、普通だった。な

ーんか独りで空回りしてるな私。空回りし

すぎて勝手に疲れてちゃ世話ないわ」

伸びをして時計を見る日花里。

時計の針は0時前を指している。

日花里「もうこんな時間かぁ。お腹すいちや
った」

× × ×

部屋に温めた肉まんを持って入って
くる日花里。

ゲームを閉じたパソコンの画面をぼん
やり見ながら肉まんをかじっている。

ビデオ通話アプリを開き、なんとなく、
なしおへの通話ボタンを押す。

なしお通話「おつかれちゃん」

日花里「(肉まんをかじったまま)あ、出た」

なしお通話「何食べてるの？」

日花里「なしお、オフ会とか行ったことあ
る？」

なしお通話「ないよ」

日花里「行こうと思わないの？」

なしお通話「怖いし」

日花里「別にみんな普通にいい人だと思うよ。

まあ、たまに特殊な人もいるかもだけど……」

なしお通話「別に誰もオレと会いたい人ないないだろーし」

日花里「それは、知らんけど」

なしお通話「めんどくさいし」

日花里「ずっと家に居るの？」

なしお通話「一応仕事行ってるし」

日花里「休みの日はずっとゲームしてんの？」

なしお通話「してる時はしてるし、してない

時はしてない」

日花里「ふーん」

日花里、残りの肉まんを全部口に押し

込んで、

日花里「なーんか疲れちゃった」

なしお通話「ゲームのやり過ぎじゃないの？」

日花里「なしおに言われたくないよ。どんな

レベルしてんのよ！」

なしお通話「オレなんて大したことないよ」

日花里「肉まんおかわり」

なしお通話「いってら〜」

なしおとのビデオ通話をオンのまま、
お尻をボリボリ掻きながら部屋を出て
いく日花里。

○日花里の実家 台所・同日（夜）

日花里、肉まんをレンジでチンしてい
る。

○日花里実家の廊下

チン出来た肉まんを二階の自分の部屋
に運ぶ日花里。

○実家の日花里の部屋・同

肉まんをかじりながら再びパソコンの
前に座る。

パソコン画面を覗くとなしおの通話は
切れている。

なしおチャット『落ちるね〜』

それを見つめながらもぐもぐと肉まん
を頬張る日花里。

○日花里のアパート・別日（日中）

日花里、玄関から入ってくる。

テーブルに置いたスマホ画面にお弁当

屋のバイト募集の写真。

日花里N「その次の日から3日経っても、な

しおはゲームにいなかった。ビデオ通話ア

プリもオフラインのまま。そんなに続けて

連絡のとれないことは今までなかった」

○お弁当屋外観（日中）

○お弁当屋・（日中）

スマホを見ながらお弁当屋を探し、店
に入っていく日花里。

日花里「すみません」

清美「はあい」

エプロン姿の店長大野清美（50）が

奥から出てくる。

日花里「あの、バイトの面接に伺ったんです

が」

清美「あーはいはい、水島さんね。いや面接
って、そんな大したことじゃないんだけど。

だってレストランで調理の仕事もされてた
んでしょ？それならもう即オツケーよ」

日花里「いえ、ここ2年程は、ほぼレストラ
ンのホールの仕事ばかりだったんで…」

清美「大丈夫大丈夫、心配ないって。来ても
らえたら助かるわあ。いつから来れる？」

日花里「いつからでも大丈夫です」

清美「ほんと！？じゃあ明日から来てもらえ
る？朝のパートさんはいるんだけど、午後
からが人手がなくなってる」

日花里「はい、わかりました！よろしくお願
いします！」

日花里N「そうして新しいバイトは意外とす
ぐに決まった」

○弁当屋の厨房・翌日（日中）

清香に段取りを教わりながら、忙しく

厨房で働く日花里。

日花里 N 「やっぱり調理の仕事は楽しい。私はこれが好きなんだなと実感した。そして、人に必要とされる事もすごく嬉しかった」

清美 「水島さん、さすがセンスあるわく。ほんと即戦力で助かるく」

嬉しそうに笑う日花里。

○日花里のアパート・同日（夜）

帰ってきた日花里。

ぐったりとしてベッドに倒れ込む。

日花里 「あー、疲れた」

ベッドで目を閉じる日花里。

でもすぐ目を開いて、

日花里 「なしお、いるかな」

起き上がりパソコンを開く日花里。

ゲームを立ち上げてみるが、

日花里 「…いない」

ビデオ通話アプリの方見てみるが『オ
フライン』となっている。

日花里「なんでだ。どうしてこの時間になし
お居ないんだ」

気になって落ち着かない様子の日花里。
ゲームのギルドチャットはいつものよ
うに賑わっていたが、今日は書き込む
気がせずゲームを閉じる。

そしてビデオ通話アプリの方になしお
へのメッセージを残しておいた。

ぴかりんチャット『どうしてるの？連絡ちょ
うだい！』

○弁当屋・翌日（日中）

日花里、弁当屋で調理をしながら、お
客さんの対応している。

ふと、なしおに似た風貌の人が店の前
を通りかかり、ハツとして目で追うが、
振り返ると別人だった。

なしおのことが気にかかりながらも、
忙しく一日が終わっていく

○日花里のアパート・同日（夜）

バイトからクタクタになって帰ってき

た日花里。

荷物を放り出し、すぐパソコンを立ち

上げる。

するとすぐビデオ通話アプリに通知が入る。

なしおチャット『おつかれちゃん』

日花里「なしお！」

日花里、すぐに通話ボタンを押す。

通話が拒否される。

ぴかりんチャット『なんで切るの？』

なしおチャット『今音声通話出来ない』

ぴかりんチャット『てか、なしお！どうして

たの？』

なしおチャット『色々あったんだよ』

ぴかりんチャット『体調でも悪かったの？』

なしおチャット『いや体調は悪くないけど』

ぴかりんチャット『だって、なしおがこんな

に長くゲームに居ないなんて今までなかつ

たじゃん』

なしおチャット『ゲーム出来ない時もあるんだよ』

ぴかりんチャット『何かあったの？』

なしおチャット『んー』

ぴかりんチャット『だって、気になるじゃん。ずっと心配してたんだよ』

なしおチャット『まあねえ…』

ぴかりんチャット『気になるし…』

なしおチャット『色々あったんだよ』

ぴかりんチャット『だから色々って何！？』

少し間があって、

なしおチャット『お母さんが死んだりとか』

日花里「（怒り気味で）はあ？何意味わかん

ない冗談言ってるの」

ぴかりんチャット『それは、冗談でも行っち

やダメなやつだよ』

なしおチャット『ほんとだよ』

ぴかりんチャット『だから、そういうのは冗談にならないから』

なしおチャット『3月15日の朝起きたら死んでたんだよ』

日花里「え！」

思わず声が出る日花里。

ぴかりんチャット『本当なの？』

なしおチャット『オレ母親と二人暮らしで、母親は持病が悪化してずっと状態は悪かったの。ろくに歩けなくなってたからメシはオレが作ってたし、記憶障害とかもあって色々大変だったんだよ』

ぴかりんチャット『そうだったんだ：』

なしおチャット『家で死んだから、ホントは警察呼んで検死とかしないといけないらしいんだけど病院の先生が状況からしてどう見ても病死でしょうってなって』

なしおチャット『オレが殺してたとしてもバレなかったじゃんて思った』

ぴかりんチャット『そんな事言わないでよ』

ぴかりんチャット『知らなかった。お母さんそんな大変な状態だったんだ：』

なしおチャット『その後、絶妙なタイミングでオレの会社が倒産した。オレ社宅に住んでたから部屋追い出されちゃったんだよね』
ぴかりんチャット『そうなの！？今どうしてるの？』

なしおチャット『今はネカフェ生活だよ』

ぴかりんチャット『だから通話できないんだ』

なしおチャット『うん』

ぴかりんチャット『お母さんのお葬式とかどうしたの？』

なしおチャット『親戚の人が色々やってくれた』

ぴかりんチャット『その親戚の人のところにしばらく住まわせてもらうとかは出来ないの？』

なしおチャット『それは無理。そういう関係だから』

ぴかりんチャット『そうなんだ』

なしおチャット『なんか、色々めんどくさくなっちゃって』

ぴかりんチャット『そりゃそんな辛いことあったんだから仕方ないよ』

なしおチャット『なんでこんなんで生きていかなきゃなんないのって思う』

日花里「え……」

ぴかりんチャット『辛いだろうけど頑張ってる』

なしおチャット『うん』

なしおチャット『そろそろ寝るね』

ぴかりんチャット『あ、ちよっと待って。直

接の連絡先教えて』

なしおチャット『これしかないよ』

ぴかりんチャット『スマホは？』

なしおチャット『充電器なくした』

ぴかりんチャット『買えばいいじゃん』

なしおチャット『めんどくさい』

ぴかりんチャット『今いるネカフェってどこ

のネカフェ？』

なしおチャット『ここどこだろ？池袋駅の近

く？前にファミマがある』

ぴかりんチャット『名前は？』

なしおチャット『わかんないよ』

ぴかりんチャット『わかんないことないでし

よ！』

なしおチャット『大丈夫だよ、おやすみ』

日花里「大丈夫って、どこがよ！」

ぴかりんチャット『絶対明日も連絡してよ！』

なしおチャット『わかった』

オフラインになるなしおの通話アプリ。

日花里「そんな大変な生活してたなんて…。

なんも言わなかったじゃん」

落ち着かない日花里、しばらくぼんや

り考え込む。

○弁当屋・翌日（日中）

作業しながらも時々なしおの事が気に

なってしまう日花里。

× × ×

○弁当屋 休憩室・同

休憩時間、スマホで池袋のネカフェを

検索する。

日花里「池袋駅付近のネカフェ、めっちゃくちゃあるじゃん」

顔をのぞかせる清美。

清美「日花里ちゃん、今日お試しで作った新作弁当、余分あるから家持って帰ってね」

日花里「ありがとうございます」

日花里、スマホをしまつて仕事に戻る。

○弁当屋 外・同日（夜）

閉店でシャッターをおろしている清美。

日花里「お疲れ様です！」

清美「お疲れ様〜」

日花里、急いで自転車で帰っていく。

○道・同日（夜）

急いで自転車を漕ぎ暗い夜道を帰る

日花里。

チカチカしている街灯。

○日花里のアパート・同日（夜）

急いで部屋に入り、荷物を放り投げパ

ソコンを開く。

ビデオ通話アプリを立ち上げると、

なしおチャット『（オフライン状態で）もう

オレの事は気にしないで！元気だね。』

の文字。

日花里、その文字をガン見しながら、

日花里「どういう意味？元気だね、っってもう

お別れみたいじゃん」

あわてて、ゲームも開いてみるが、な

しおはインしていない。

日花里「ゲームもやってない」

がっかりして、ベッドにもたれかかり

考え込む日花里。

日花里「なんでこんな気になってるんだろ。

なしおなのにな」

そこに日花里へのギルドチャットのメ

ッセージが目に入る。

日花里、パソコン画面に顔を近づけて

チャットをガン見。

ゆうゆうチャット『なしおさんがギルチャつてめずらしいですよね』

アルパカチャット『めったにないよね？恥ずかしがりやさんなのかな』

ゆうゆうチャット『でもなんか今生の別れみたいな言い方でしたね』

めいちゃんチャット『めいちゃんたくさん装備もらっちゃったよ！』

そして慌ててチャットを書き込む。

ぴかりんチャット『なしお、何か言ってたの？？』

アルパカチャット『お！ぴかりんおつかれ』

アルパカチャット『なしおさん、暫くゲーム出来ないらしくて、最悪戻って来ないかもしれないから装備要る人もらって下さいって』

日花里「え？戻らないつもりなんだ」

ゆうゆうチャット『今までお世話になりありがとうございましたとか、律儀な人だった

んですね』

めいちゃんチャット『他のゲームに浮気じゃないの？プンスカ』

アルパカチャット『その可能性もあるけど、それは個人の自由だからw』

アルパカチャット『まあ、仕事が忙しいのかもしれないしね』

ぴかりんチャット『それはない。会社倒産したって言ってたから』

アルパカチャット『あらーそれは大変だね』
アルパカチャット『ぴかりんはなしおさんと仲良かったんだね』

日花里、ちよつと考える。

日花里「別に仲が良いわけじゃないけど：」
ぴかりんチャット『最近ちよつと話す機会があっただけですよw』

アルパカチャット『なるほど』
日花里「なしお：、もう二度と話すこともなくなっちゃうってことなのかな」

日花里、ちよつと考え込む。

× × × (フラッシュ)

なしおチャット『なんでこんなんで生きてい
かなきゃなんなのって思う』

× × ×

日花里「なんだろ…、なしおと二度と話せな
いのはすごく嫌だ」

日花里、時計を見る。22時34分。

慌ててカバンを持ち部屋を出ていく。

○日花里のアパート 自転車置場・同日(夜)

急いで自転車を出し、駅に向かって漕

ぎ出す日花里。

雲の間から月明かり漏れている。

○駅・同日(夜)

日花里、自転車を止め早足で改札口へ
向かう。

○電車の中・同日(夜)

電車に揺られながら落ち着かない様子

で流れる夜景を見つめる日花里。

○池袋駅 改札口・同日（夜）

改札口を飛び出して来る日花里。

スマホを取り出し地図アプリを開く。

日花里「ファミマの前のネカフェって言って

たよな」

駅を飛び出しファミマを探す。

出口を間違ったのか、なかなか見つけ

られず焦る日花里。

○ネットカフェ前の道・同日（夜）

やっと、なしおが居るかもしれないネ

ットカフェを見つける。

少し考えるが決心したようにネットカ

フェに入っていく。

○ネットカフェ店内・同日（夜）

受付へ行き店員に話す日花里。

日花里「あの、すみません。ここに知り合い

が来てないか知りたいんですけど」

店員「ちよっと個人情報なんでお教えは出来ないですね」

日花里「ですよねー。じゃあ、あの…、30分お願いできますか？」

店員「初めてのご利用ですか？」

日花里「あ、はい…」

店員「では会員カードを作って頂くので本人確認出来るもの何かお持ちですか」

日花里「え、あ、…はい」

日花里 バッグの中を探つて免許証を出す。

○ネットカフェ店内・同日（夜）

日花里、店内奥の個室エリアに入っていく。

人が個室を出入りしたり、通路を歩いているのを目を凝らして見る。

日花里 M「ほんとにこの店にいるのかな。これじゃどこに居るのかわからないよ」

日花里、個室を覗こうとして背伸びしてみる。

横を通る客にジロジロ見られてやめる。

日花里「ここまで来たのに……」

日花里M「探すのは無理なのか？でも、今を逃したらこの店にも居なくなって、居所の手がかりもなくなって、本当になしおと永遠にさよならになっちゃうかもしれない」

× × × (フラッシュユ)

なしおチャット『(オフライン状態で) もう

オレの事は気にしないで！元気でね。』

× × ×

日花里「それはなんでか凄く嫌だ。なんでかわからないけど凄く、凄く嫌だ！なんなんだよ、なしお！なんでこんな気持ちにさせるんだよ！なしおのクセに！そもそも、なしおは、なしおのクセに私を真夜中にこんなところ迄走らせやがって！腹立ってきた！も

おー！」

日花里「なしおー！」

思わず叫ぶ日花里。

日花里「どこー！？なしお！」

個室ブースから顔をのぞかせる人や、
ドアの隙間からチラ見してくる人がい
る。店員も遠くから顔をのぞかせる。

日花里「なしお！出てきて！なしおー！」

店員が止めようと日花里の方へ近づい
てくる。

店員「お客様」

日花里、店員から逃げながら叫ぶ

日花里「なしおのクセにくく！」

その時少し離れた個室のドアが開き、
うつむきながらなしおが出てきて足早
に日花里に近寄り、日花里の腕を掴ん
で引っ張っていく。

驚いたように引っ張られていく日花里。

そのままなしおの個室の方へ。

日花里「なしお！」

なしお「（人差し指を口に当てて）しっ！恥
ずかしいからやめてって」

日花里「ほんとにいた！」

慌てて日花里の口に手を当てて塞ぐな

しお。

なしお「ちよつと」

日花里「（口ふさがれたまま）……ごめん……」

○ネットカフェ個室内・同日（夜）

一人用の狭い個室内に二人座り、しばらく無言……。

なしおはパソコンの画面に流れている動画を眺めながら日花里を気にしている。

なしお「どっから来たの？」

日花里「越谷」

なしお「埼玉？」

日花里「なしお……大丈夫？」

なしお「うん。別に大丈夫」

日花里「いつまでここに居るの？」

なしお「わかんない」

日花里「ずっとここに居るわけにはいかない

でしょ？」

なしお「そろそろあったかくなってくるし野宿でもするかな」

日花里「何言ってるの！」

なしお「どうとでもなるよ」

日花里「：うち来れば？」

なしお、少し驚いて日花里を見て、すぐ目線をパソコンに戻す

なしお「そういうわけにはいかないよ」

日花里「なんでよ、他に行くとこないんですよ？仕事見つかるまで居ればいいじゃん」

なしお「それはさすがに申し訳ないでしょ」

日花里「別にいいし」

なしお「オレ、ヒモになっちゃうじゃん」

日花里「少しくらいならいいんじゃない？」
なしお、日花里をチラ見して、

なしお「甘やかすとろくな子にならないよ」

日花里「そのうちスパルタになるから」

なしお「スパルタはやだ」

日花里「いい子ならスパルタはないよ」

なしお「それはどうかなー。オレいい子じゃないし」

日花里「じゃあスパルタだな」

なしお「それは却下」

クスツと笑った日花里の目に安心感と嬉しさで涙がにじむ。

なしおはパソコンの方を向いたまま動画をみている。

その横顔を見つめる日花里。

なしお「どっちにしても今日はここで泊まるでしょ？」

日花里「うん、もう終電厳しいし。でも私、

30分しか申し込んでないや」

なしお「延長してきたら？」

日花里「うん、してくる」

立ち上がる日花里。

○インターネットカフェ受付前・同日

日花里「すみません、やっぱり明日の朝までお願いしたいんですけど」

店員「はい、何時間ですか」

日花里「えーっと、…」

日花里、時間表を見る。

○ネットカフェ 椅子ブース・同日

日花里、自分のブースに行ってあまりにもオープンなのに驚く。

日花里「これ…、寝れる場所じゃないな」

少し考えて、なしおの個室へ向かう。

○ネットカフェ なしおの個室内・同日

ドアをノックする音。

なしお、ドアを開けると日花里が立っている。

日花里「お邪魔します」

日花里、無理やりなしおの個室に入る。

なしお「延長出来た？」

日花里「うん、でも私の場所、椅子だけなんだよね」

なしお「個室満室だったの？」

日花里「わかんない。最初申し込みする時急いで手続きしたから……」

なしお「なにそれ」

日花里「だって初めて来たんだもん」

なしお「初めてなんだ？」

日花里「とりあえず6時間パックにしたから

明日朝6時過ぎに出発ね。もう寝るよ」

日花里、壁に向かって横になる。

なしお「え？」

日花里「おやすみ」

なしお「：おやすみ」

なしお、パソコンを消し日花里に背を向けて横になる。

なしお「これってバレたら怒られるやつ」

日花里「そうなの？」

なしお「そらしようでしょ。てか、せま……」

日花里「我慢して」

日花里、目を開けたまま。

背中合わせで寝転ぶ二人の姿。

狭くて背中同士が少し当たっている。

日花里「なしお…、あったか」

なしお「なんそれ」

日花里N「なしおがそこに存在している事を
感じた」

○ネットカフェの店の前・翌日（早朝）

店から出てくる日花里となしお。

なしおの手にはリュックサックとト
トバッグひとつ。

日花里「なしお、荷物少なっ」

なしお「これで十分だよ」

日花里「逆に何が入ってんの？」

なしお「いらんもん」

日花里「意味わかんない」

二人、駅に向かう。

○電車内同日（早朝）

電車に揺られる日花里と、なしお。

朝焼けに照らされる町並みを二人眺め
ている。

日花里の表情は安心したように明るい。

○道・同日（朝）

自転車を押す日花里と並んで歩くなし
お。

二人朝日の中、楽しそうに話しながら
歩いている。

○日花里のアパート・同日（日中）

部屋に入る日花里。

日花里「狭いけどどうぞ」

なしお「どうも…」

日花里「遠慮しないでいいよ」

なしお「お邪魔します…」

部屋に入る二人。

日花里「適当に座って」

日花里、コンビニの袋をテーブルに置
き、パンを取り出す。

日花里「コーヒーでいい？」

なしお「うん」

キッチンへ行く日花里。

なしお、床に座り部屋を見回す。

日花里「あんまり見ないでね。片付けは苦手なの」

なしお「別に散らかってないじゃん」

日花里「どうせ帰ったらパソコンするか寝るだけだからね」

× × ×

お湯が湧く。

日花里、インスタントコーヒーを作る。

マグカップを2つ持って来てテーブルに置く。

日花里「私今日昼からバイト行くから、自由にしてて。まあ：しばらくは何も考えず過ごしてもいいんじゃない？」

なしお「：ありがと」

日花里「あ、パソコン使う？」

なしお「持ってる」

なしお、トートバッグからノートパソコンを取り出す。

日花里 「パソコン持ってたんだ！」

なしお 「うん」

日花里 「これWiFiつながやつ」

日花里 メモを見せる。

日花里 「あ、着替えとかあるの？」

なしお 「とりあえずの分は」

日花里 「ていうか、他の家の荷物とかどうし

たの？」

なしお 「置いてきた」

日花里 「そうなんだ。まあ、足りない分はま

た買いに行こ」

なしお 「うん……」

日花里 「なんか私、世話焼きババアみたいだ

ね」

なしお 「どうしてオレなんかにそんなに親切

にしてくれるの？」

日花里 「え？どうして……だろうね？わかんないけど、なんかほっとけない……みたいなの？」

なしお 「お人好しだね」

日花里 「なんか気になっちゃうんだから仕方

ないじゃん。困ってるなら助けられる人が
助ければいいじゃん。それだけだよ」

なしお「ありがとう」

日花里「どういたしまして」

照れくさそうにコーヒーを飲む日花里。

○弁当屋・同日（日中）

弁当屋で仕事の日花里。

清美が嬉しそうに話しかける。

清美「あら？日花里ちゃん、何か良いことあ
った？」

日花里「え？まあ：ちよつと」

清美「あく！彼氏でも出来た？」

日花里「ええっ？いや別に違いますよ」

清美「ほんとにいく？」

日花里「そんなんじゃないですって」

清美「怪しいなあ」

日花里「怪しくありませんって」

お客「すいませーん」

清美「あ、はあい、いらっしやい」

接客をしに店頭に行く清美。

少しにやけている日花里。

○日花里のアパート・同日（夜）

日花里「ただいまあ」

アパートのドアを開けるが部屋が暗い。

日花里「え？暗っ」

慌てて中に入り、

日花里「なしお？」

電気をつける。

ベッドで寝ているなしお。

日花里「寝てたのか」

ホッとする日花里。

その気配で目を覚ます、なしお。

なしお「あ、おかえり。寝ちゃってた」

日花里「別にいいよ、寝てて。あ、でも弁当

買ってきたんだけど。食べる？」

なしお「食べる」

日花里、にっこりして弁当を開く。

なしお「うまそ」

日花里「食べて、私は夕方にまかない食べたから」

なしお「いただきます」

弁当を食べるなしお。

日花里、缶ビールを二本持ってきて、

日花里「飲む？」

なしお「オレ飲めない」

日花里「そうなんだ」

なしお「うま。これ、ぴかりんが作ったの？」

日花里「まあ、下ごしらえしてあるのを調理

するだけだけどね」

日花里、缶ビールをグビツと飲む。

なしお「あったかい」

日花里「うん」

日花里、嬉しそうに弁当を食べるなし

おを見ている。

なしお「なに？」

日花里「私お弁当作って売ってるけど、作っ

たお弁当食べてる人初めて見るなあと思っ

て」

なしお「見ないでよ」

日花里「いや、見るよ（笑）」

なしお「ダメだよ」

日花里「なんでだよ」

和やかな時間が流れる。

× × ×

シャワーから出てくる日花里。

パソコンでゲームをしているなしお。

日花里「シャワー使っていていいよ」

なしお「ありがと」

髪をタオルで拭きながら、ゲームをし

ているなしおを見ている日花里。

日花里「装備、あげちゃったんだって？」

なしお「野宿生活なると思ってたから。でも

また集めるから大丈夫」

日花里「みんな、心配してたよ。今生の別れ

みたいって」

なしお「心配してくれるなんて、みんなやさ

しいね」

日花里「なんだかんだ言って、ゲームの中の

関係だけど、日常生活を共にしているみたいな感覚になってるもん」

なしお「へー、そんなもんなの？」

日花里「少なくとも、私はそうだよ。インターネットの世界に、人との繋がりを求めてパソコン開いてた」

なしお「わからなくはないけど」

日花里「なしおはグループチャット入ってこないもんね」

なしお「オレはそういうの苦手かな、別に人との繋がりは求めないし」

日花里「でも、私にはいっつもウザい絡み方してきてたよね」

なしお「ウザくないでしょ」

日花里「ウザいよ！ホラー大嫌いだからやめてって言うてるのに、怖いサイト見せようとしたりしてきたじゃん」

なしお「それは…、やめて、っていうのはフリでしょ？」

日花里「はああ？フリだと思ってたの？違う

し！」

なしお「じゃあ、今から一緒に怖い動画見る？」

日花里「無理無理無理！絶対無理！」

ゲームを閉じて動画サイトを開くなしお。

なしお「ほら、これとかヤバそうじゃない？」

日花里「だから無理だって！やめてよ」

日花里、なしおの手を掴んで引っ張る。

なしお「大丈夫だよ、一緒に見たら平気だよ」

日花里「そういう問題じゃないから。ダメだ
って！」

日花里となしお、手の抑え合いをして
しばらくじゃれ合っている。

ふと日花里がなしおとの距離感に気づ
き我に返り動きを止める。

日花里、なしおの両腕を掴んだまま、
しばし目があって、

日花里「（この距離感どうしょ）・・・」

なしお「・・・」

日花里「（苦し紛れに）年上の言うことを聞きなさい」

なしお「：年上っぽくない」

日花里、なしおの腕を離して、

日花里「私9歳も年上だよ！」

なしお「だからなんだよ（薄笑い）」

日花里「・・・」

なしお「・・・」

日花里「夜更かしは肌に悪いので、ババアは寝ます」

ベッドに入る日花里。

なしお「おやすみ」

なしお、パソコンにイヤホンをつけて

動画を見始める。

日花里、布団に入ったまま、

日花里「寝ないの？」

なしお「夕方寝てたから眠くない」

日花里「そか：」

日花里、むくっと起き出して、クローゼットから毛布を出し、

日花里「寝る時これ使って」

なしお「ありがと」

日花里、再び布団にもぐる。

なしお「そういや、みんながぴかりん最近見

ないねって言ってたよ」

日花里「ああ、最近ゲームやってないもんね」

なしお「やんないの？」

日花里「元からああいうゲームはよくわかん

ないし」

なしお「わかんないのになんでやってたの？」

日花里「んー、現実逃避？」

なしお「逃避してたんだ」

日花里「そりや、色々と逃避もしたくなるで

しょ」

なしお「もう逃避しなくていいの？」

なしおの言葉にハツとする日花里。

日花里「・・・」

なしお「電気消す？」

日花里「いや、いい。明るくても寝れる」

なしお「そか」

日花里、しばらくは目を開けたまま眠れない。

○日花里のアパートの部屋・翌日（朝）

スマホのアラームで目を覚ます日花里。
床で毛布にくるまって寝ているなしお。

日花里、朝ごはんにとーストを焼いて食べる。

その物音で起きてくるなしお。

日花里「あ、起こしちやった？」

なしお「おはよ」

日花里「洗濯物ある？」

なしお「：、シャワー浴びていい？」

日花里「いいよ。脱いだの洗濯機に放り込んで

どいて」

なしお「うん」

なしお、バスルームに向かう。

日花里「あ、タオル：」

バスルームに行く日花里。

脱ぎかけのなしおを見て、目をそらし、

日花里「そのタオル使って」

なしお「わかった」

部屋に戻って朝食のトーストを頬張る

日花里。

日花里「何意識しちゃってるんだろ、私。9

歳も年下だったの。なしおからしたら、私

は面倒みてくれる親戚のおばちゃんみたい

なもんだよ」

シャワーの音が聞こえる。

× × ×

ガチャッとバスルームのドアの開く音

がする。

なしお「ぴかりん」

日花里「なに？」

バスルームの方のぞく日花里。

なしおもバスルームから顔をのぞかせ

ている。

なしお「オレ、着替え、もう無かった。これ

全部洗濯するやつだった」

日花里「：次の休み、買い物行こっか」

× × ×

なしお、腰にバスタオル巻いて肩にタオル羽織ってトーストをかじっている。

日花里、乾燥機の前でなしおの衣類が回るのを見ながら。

日花里「だから、親戚のおばちゃんなんだつて」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。

日花里N「そんな風に、なしおは親戚の家に居候しているかのような状態でうちに居て、数日が過ぎた」

○日花里のアパート・別日（日中）

日花里「じゃあ、バイト行ってくるね」

なしお「いってらっしゃい」

なしお、歯磨きをしながら出ていく日花里を見送る。

なんとなくベランダから外を眺めると、自転車を取りに行く日花里が見える。

○アパート自転車置き場・同日（日中）

バイトに行くために自転車置場に向か

う日花里。

そこに突然神宮寺が現れる。

神宮寺「日花里」

日花里「！！」

日花里、慌てて自転車を出そうとする。

それを無理やり止める神宮寺。

日花里「離して。もうすべて終わったんです」

神宮寺「妻と別れた」

ハツとして神宮寺を見る日花里。

神宮寺「あの後、妻に垣内社長の事詰め寄られて結局別れることになった。垣内社長とも関係を切った。やっぱりあんなやり方で仕事を貰うっていうのは間違ってた。以前のように地道にコツコツと心を込めた料理を食べてもらうレストランをもう一度日花里とやり直したいんだ」

日花里「今更、もう遅いです」

神宮寺「頼む。オレが悪かった。もう一度考

え直してくれ」

悲痛な神宮寺の叫びにとまどい動揺する日花里。

神宮寺「お願いだ、日花里が居なくなっちゃった。日花里がいないとオレは：ダメなんだ。結婚しよう！」

そう言って日花里を抱きしめる神宮寺。

日花里「結婚：？」

「結婚」の言葉に動揺し拒みきれない

日花里。

その様子を窓から無表情で見ているなしお。

○ショッピングモール・別日（日中）

買い物に来ている日花里となしお。

いくつか、なしおの生活用品の買い物をして、カフェでお茶している。

日花里「なしお、彼女いたことないの？」

なしお「一回あるよ。高校の時」

日花里「あるんだ？」

なしお「告られたからつきあったけど、何か
わかんないまま3ヶ月後にフラれた」

日花里「デリカシーの無さに嫌気さされたん
じゃない？」

なしお「そこまで会話もしてない」

日花里「あ、それじゃない？会話無さすぎて
フラれた？」

なしお「なんでかわからんけど、よく怒られ
てたし」

日花里「それは彼女を怒らす理由があつたか
らだろうね」

なしお「なにもしてないよ」

日花里「お年頃の女子は繊細なのよ」

なしお「わけわからん」

なしお、アイスカフェオレをストロー
で吸い込む。

なしお「昨日のあれ誰？自転車置き場の男の
人」

日花里、動揺して手を止める。

日花里「あー、あれ？見てたの？あれ：は、

元彼」

なしお「働いてたレストランのオーナー？」

日花里「うん：、私、元カレの事、話してたっけ？」

なしお「うん」

日花里「どこまで：話してた：？」

なしお「元料理教室の先生で、恩人だって言ってた」

日花里「うん、あ、そうそう。そんな感じ」

不倫だった事は言っていなかったのかと少しホツとする日花里。

なしお「で、奥さんいるけどつきあった人」

日花里、飲んでいるコーヒーでむせそうになる。

日花里「え？そこまで話してた？」

なしお「その前の元彼に一方的にフラれてヤケになってた時に勢いで不倫に走ったって」

日花里「おおよそ合ってるけどちよつとニュアンスが違う」

なしお「なんか、前に酔っ払った勢いで色々

しゃべってたよ」

日花里「うそ、記憶にない…」

なしお「より戻すの？」

日花里「え…、それは…、まだわかんないよ」

なしお「・・・」

日花里「でも、奥さんとは別れたらしい」

なしお「ふーん」

日花里「で、私が別れるきっかけになった女

とも手を切ったって」

なしお「他にも女いたんだ」

日花里「：まあ、取引先の社長で仕事もらう

ために仕方なくって言ってたけど…」

なしお「ふーん」

日花里「まあ、とうとう結婚しよって言われ

たから、この際割り切って結婚しちゃうって

レストランも私の物にしちゃうってのもア

リかもねー」

と言って、立ち上がり、

日花里「じゃあ、なしおのマグカップでも買

いに行こ！私が買ったげるよ！」

なしお、ストローを吸いながら日花里
を見ている。

○日花里のアパート・同日（夕方）

買い物から帰ってきた日花里となしお。

日花里「早速買ってきたマグカップでコーヒ

ー飲もう！」

そう言っておそろいのマグカップ2つ
をテーブルに置く。

なしお「ぴかりんのみまで買ってるし」

日花里「いいじゃーん。せっかくだからおそ
ろにしといた。カップルみたいだね。カ
ップだけに。なんつって！」

なしお「つままないよ」

日花里「おだまり！子供にはこのダサイダジ
ヤレの侘び寂びってものがわかんないの
か！」

なしお「子供じゃねーし」

日花里「子供だよー。言動すべて子供だよ
ー！」

なしお「精神年齢同じでしょ」

日花里「同じじゃねーし。9年分経験値上だし」

なしお「・・・」

日花里「って、誰がオバハンやねん！」

なしお「なんか情緒バグってない？」

日花里「バグってない！平静です」

なしお「平静ではない」

日花里「コーヒー入れてくるます！」

二つのカップを手にキッチンへ向かう

日花里。

なしお「・・・」

× × ×

キッチンでお湯を沸かす日花里。

神宮寺の言葉が頭の中で回っている。

（アパートの自転車置き場での回想）

神宮寺「お願いだ、日花里がいないとオレは

：ダメなんだ。結婚しよう！」

そう言って日花里を抱きしめる神宮寺。

神宮寺「明日夜、日花里のアパート行っても

いいかい？ちゃんと話したい」

日花里「アパートはダメ。会うなら外で：」

神宮寺「わかった。夜8時に迎えにいくよ」

（回想終わり）

日花里、キッチンから部屋のなしおを見つめる。

日花里M「奥さんと別れたって：。大切に作り上げてきたレストランのためにも私は神宮寺先生のところに戻る方が正解なんだろうか：」

お湯が沸いてグツグツ行っている。

日花里M「ちゃんとやり直して今度こそ本当に結婚出来るんだろうか：。神宮寺先生の言葉が本当なら結婚への一番の近道になる」
なしお「なんかブクブクいってない？」

日花里、ハッと我に返り、

日花里「あ、ほんとだ」

あわててやかんを持とうとして熱いところ
に手が触れ、

日花里「アチツ！」

手を避けた瞬間そばにあった食器に手があたり、ガシャンと大きな音がする。

なしお「大丈夫？」

日花里「あ、大丈夫大丈夫！なんでもない！」

心配して様子を見に来るなしお。

日花里「大丈夫だって」

なしお「手、ここ赤くなってるよ」

そう言って日花里の手を掴む、なしお。

なしお「冷やした方が良いんじゃない？」

なしお、日花里の手を水道の蛇口のと

ころへ持っていく、水を当てる。

そんななしおを見つめたまま固まって

いる日花里。

日花里M「てか結婚て、何？毎日一緒に居て、

ご飯食べて、つままない話が出来て、時々

けんかして、すごく腹がたってもまだ話し

たいと思って、夜中に肉まん食べる姿見ら

れても平気で、かっこつける必要なくて、

自分が自分で居られる、そんな毎日と一緒に

に過ごしたい、そんな人と暮らす事」

なしおの横顔に、突然目の前がパアッと明るくなつたように感じる日花里。

日花里 M 「トンネル抜けた」

思わずなしおに抱きつく。

なしお、一瞬驚くが、なしおも日花里をそっと抱きしめ返す。

水道の水はジャージャー出っぱなし。

日花里 「私、なしおとずっと一緒にいたい…。

私、なしおが好きかも」

なしお 「オレも…、好きかも」

その返しに驚く日花里。

日花里 「9歳も年上なのに？」

なしお 「だから精神年齢は変わらないから」

日花里 「親戚のおばちゃんみたいなの？」

なしお、じっと日花里を見つめキスする。

なしお 「親戚のおばちゃんにキスしたくならないよ」

日花里、動揺しながら、

日花里 「毎晩同じ部屋で寝てて全く手も出し

てこないくせに？」

なしお「手、出して欲しかったの？」

日花里「なんで上から目線なの」

今度は日花里からなしおにキスをする。

日花里「あ、ちよっと待って」

急いでスマホを取りに行き神宮寺にメ
ールを打つ日花里。

なしお、水道の蛇口を閉め、インスタ
ントコーヒーの入ったカップにお湯を
注ぎ部屋のテーブルへ運ぶ。

日花里メール『すみません、やっぱり今日会
えません。他に結婚したい人が居ます』

日花里、送信ボタンを押すとスマホを
放り投げ、なしおを見る。

日花里N「答えは、ここにあった」

再びなしおに抱きつく日花里。

そのままベッドに倒れこむ二人。

テーブルには湯気の立つマグカップ。

日花里「なしお。名前教えて」

おわり